



Title	国際結婚で福島県に嫁いだ中国人女性の主体性とその形成過程：東日本大震災経験者のライフストーリーから読み解く
Author(s)	王, 石諾; 三好, 恵真子
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 97-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95082
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国際結婚で福島県に嫁いだ中国人女性の主体性とその形成過程 — 東日本大震災経験者のライフストーリーから読み解く —

Subjectivity and the Formation Process of Chinese Women Married to Fukushima Prefecture in Intermarriage: Based on the Life Story of People Who Have Experienced the Great East Japan Earthquake

王 石諾*

WANG Shinuo

三好 恵真子**

MIYOSHI Emako

Abstract

In the late 1980s, the problem of “marriage difficulties for men” in Japan society became more and more serious. In order to solve this problem, Japan society was actively introducing “Asian brides”, from the government to the private sector. As a result, the Japanese-husband-and-foreign-wife type of intermarriages increased. But behind this positive introduction, the lives of “Asian brides” and their perspectives are often overlooked in discussions of various social issues. Despite the increasingly three-dimensional image of women in the studies of intermarriages, the discussion of the image of women in social issues - such as the Great East Japan Earthquake - only stays on the superficial side of being “vulnerable people to disaster”.

In the previous studies, the emphasis were on finding the mechanism of intermarriage rather than the continuity of individual’s life. Even when the subjectivity of those women became the focus, the discussion was only held within the framework of the family. Therefore, the research questions are: is it possible that subjectivity will be exerted within a broader framework such as their living community? And if the answer is positive, how the subjectivity is reflected and how it is formed?

Having this problem in mind, this paper provided with a microscopic perspective of “individual’s life”, at the intersection of the discussion of intermarriage and the Great East Japan Earthquake. Specifically, based on the life story of 2 women, who were born in the northeastern region of China and moved to Fukushima prefecture after marrying to Japanese men, this paper aimed to approach the women’s subjectivity mainly from their experience of the earthquake.

As a result, by analyzing the behaviors of the two women after the disaster, the study found that women’s subjectivity was not only confined in the framework of the family, but also manifested in their living community. Furthermore, based on the women’s life story, the author analyzed the accumulation process of their subjectivity under the framework of “agency”. “Agency” shows a living strategy, different from straightforward imaginations that the women are either subject to the limitation or resist the structure, they take on the existing relationship and at the same time work towards desirable ways of life by readjusting step by step. Finally, the author argued that, although those women have surpassed the level of “vulnerable people to disaster”, the vulnerability of belonging is worthy of further discussion as a future topic.

* 大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程

** 大阪大学大学院人間科学研究科・教授

Keywords: Intermarriage, The Great East Japan Earthquake, Chinese Women, Subjectivity, Agency, Life Story Method

I はじめに

厚生労働省による 2021 年の婚姻件数の統計を見ると、日本における婚姻件数の総数は 634,749 件であり、その内、国際結婚の件数は 34,393 件で全体の約 4.9%である。この中で「妻日本・夫外国」よりも「夫日本、妻外国」のケースの方が圧倒的に多く、国際結婚件数の約 78%を占めている。また妻の国籍は中国最も多く、フィリピン、韓国・朝鮮、タイの順と続くが、日本人男性とアジア人女性の結婚が国際結婚の大部分を占めている状況にある⁽¹⁾。本稿で扱う、アジアから日本に結婚移住した女性の問題に焦点を当てる議論は、実に 40 年前にさかのぼることができる。

先行研究については第 2 章で詳述していくが、1980 年代後半、日本の高度経済成長による適齢期人口の格差、晩婚化、女性の結婚観の変化、男女の結婚観のギャップなどの理由により、「男性結婚難」という社会現状が深刻になり、殊に過疎化と少子高齢化が進む農村・漁村において、結婚相手として外国人を求める多くの男性が見られた。その問題を解決するために、桑山 (1996) が詳しく記述した山形県の農村部のように、嫁入りを斡旋する主体は、最初の行政主導から民間の結婚仲介業者へと変化していった。こうして、「日本人夫、外国人妻」の国際結婚数が大幅に増加していくのであるが、その中で、概して 1970 年代は韓国籍女性の割合が大きく、80 年代からフィリピン籍女性、90 年代後半から中国籍女性へと出身地の変容が見られた (賽 2011)。

しかし、こうした国際結婚で日本に移住する女性たちについて、2000 年以前の研究では、出身国の区分さえも論じられず、「アジア人花嫁⁽²⁾」の枠に一括りされていた。それに加えて、1980 年代から 20 世紀末までの研究では日本人研究者の「農村の花嫁」を代表として、主として受け入れ側の日本社会に焦点を当て、国際結婚に焦点を当てて農村地域住民の意識変化 (松本・秋武 1994: 1995) や農村社会と「家」の変化 (右谷 1998) などが着目されていた。これらの研究は、当事者である女性自身に目を向けるというよりも、むしろ地域社会や日本人家族に焦点が当てられている。一方、外国人妻の生活・居留意識を分析する研究 (中澤 1996; 桑山 1995) がなされてきたとはいえ、主に女性の来日以降の状況に限定し、日本にたどり着くまでのプロセスにはあまり目が向けられてこなかった。そのため一連の研究では、外国人妻を「農村の花嫁」として一括りに捉える潮流が見えてきた。それゆえに、出身国と日本社会の経済格差による経済的な劣勢と、地域に継承される強固な家父長制を背景とした夫婦間の不公平な地位の差や、少子高齢化対策としての出産・育児の性役割、「性」のサービス提供者としてのジェンダー的な劣勢など、アジア人結婚移住女性の生活上の苦悩の実態解明 (田中 1996; 笹川 1990; 福村 2017) が目指されてきたのである。

続いて 2000 年以降になると、結婚移住女性の描かれ方が徐々に刷新が見られ、彼女らが弱者としての描き方から脱する論考が登場し、日本人と同じ立場の「生活者」として捉え直すことが求められた。それに関連して、賽漢卓娜と郝洪芳の研究を代表した中国人女性を中心にした研究の貢献により、これまで見過ごされてきた出身地域、階層、学歴などをめぐる検討が多くなされてきた。さらに 2010 年代以降の議論では、「個」である一人の人間としての一面を重要視しつつ、弱者として描かれ続けている側面も否めない点についても論じられている (福村 2017)。

しかしながら、こうした積極的に受け入れられていった「外国人妻」自身の生活やまなざしについては、社会的課題の議論のインパクトにより影響を受け、概して埋没しがちであった。その一例が、2011年の東日本大震災の議論にも見られた。すなわち、外国人もしくは移民は、日本語能力が十分ではない場合や、地域社会の慣習や地理に不慣れな場合に「災害弱者」となりうるため、「心の壁」や「言語の壁」などの理由で、東日本大震災発生時において、東北に住んでいる外国人は少なからず、「災害弱者」と位置づけられた（土田 2016: 265）。しかし一方で、震災直後における外国人の「帰国ラッシュ」を取り上げたメディア報道により、「日本を脱出する」外国人らの身勝手な行動への批判が隆起したことに対して、その焦点は「帰った」、「残った」ではなく、なぜ外国人は帰らざるをえなかったのかを考えるべきだとの論考が出ており（李 2012: 60）、また、帰国報道とは対照的に「国を挙げて」の復旧・復興に参加する在日外国人の姿を伝えられることが大切だとの論調（鈴木 2012: 18-19）も見られた。こうした背景の中で、震災渦中の外国人女性に関する描写が僅かであったものの、その例として被災地でのフィリピン人女性に関して、日本語能力不足で、固定化された就業構造の中で排除され、生活において夫の同意や協力に頼らざるをえないという側面が提起された（皆川 2012）。これとは対照的に、被災地でのフィリピン女性は震災を機に生活再建のために社会的ネットワークを拡大させ、「弱者」から「地域に貢献できる人材」に向けて努力していることも描写された（土田 2016）。それにもかかわらず、東北に移住する外国人女性に関して、「乏しい社会的・文化的資本の問題で、災害時に彼女らが情報弱者になりやすい」と李（2018）が指摘したように、彼女らの「災害弱者」としての脆弱な側面は依然強調されている。

ただし、彼女らのまなざしに即せば、単に支援すべきとする「弱者」の側面以外にも、多様な解釈の余地が未だ残されているのではないだろうか。こうした先行研究の動向に鑑みれば、国際結婚における女性像は初期の膨大なイメージから近年、より明瞭になってきた「個」の姿へと変遷しつつあるものの、東日本大震災のような災害等の複雑な社会問題の議論においては、いまだその女性像が単純化されて言及されるに過ぎないと言える。それゆえに、こうした社会的課題における「個」である外国人妻の姿勢を捉え直すことに対して、さらなる検討の必要があると考えられる。さらに近年、境界人に対する関心が高まりつつあり（赤坂ら 2019）、境界人である国際婚の女性たちが直面する問題自体は、決して彼女らのみに限定されるものではなく、より多くの人々の生き方へ参照できる可能性が秘められているのではないかと考えた。そこで本稿では、国際結婚と震災とが交差する領域に生きている外国人妻の主体性について、1960年代前後に中国東北地域で生まれ、国際結婚で福島県へ移住した2人の女性の語りから考察を深めていきたい。

特に本稿で中国東北出身の女性に目を向ける理由については、中国東北土地における戦争歴史の残響があること、すなわち第二次世界大戦末期の関東軍が大連港（今中国東北）から撤退する混乱の中で、日本へ帰国できず、中国大陸に残留した日本人、いわゆる「中国残留邦人⁽³⁾」に関わる地域であるからである。1972年9月の日中国交正常化を機に、国の支援を受けて「肉親探し」ための訪日活動が始め、その後家族を呼び寄せて日本に移住した人は数多く存在した。そして2020年11月末時点において、永住帰国を果たした中国残留邦人は6724人（国費帰国者は20911人）に登り、その中で、福島県へ永住帰国した中国残留邦人は181（国費帰国者は685人）である。東北地方と日本との繋がりは、もはやこの歴史の流れに布置されている。また、東北出身の本研究対象者であるYと対話する際、「我々の所（故郷）には専門の婚姻仲介が多い。若い（女の）子ばかり集まっている」という語りからも、歴史的繋がりの延長線に国際結婚仲介業者サービスが現れたことも分かってきた。こうした状況に鑑みて、福島県の中

国人女性に東北出身の割合を示す正確な資料は存在しないものの、先述のように、中国東北地方では日本とつながるルートの存在自体が強く確認できるといえよう。

従って本稿では、マクロな国際結婚課題における「個」の事例として、歴史的文脈から日本と結び付く中国東北地方に生まれ、結婚移住で来日し、さらに2011年の大震災の経験を持つ、福島県在住の女性方の生活実践を取り上げる。そのためにまず、先行研究と異なる本稿の位置づけを明確化した上で、来歴が対照的に異なる2人のライフストーリーを描き出していく。続いて「構造」の内に生きる女性たちの「主体性」を巡り、震災後の行動から従来の「災害弱者」とは異なる女性像を提示していく。さらにその主体性の形成プロセスに関して、女性たちの人生経験を踏まえつつ「行為主体性」という枠組みの下で考察を深めていく。

II 先行研究及び本研究の視点

1. 日本の国際結婚に関する先行研究

年代軸に沿って関連する研究を概観すると、主に3段階に分けられる。まず1980年代半ばから2000年までの間は、受け入れ社会の視点が特徴となり、来日後の女性の苦悩の描写の力点が置かれていた。そして2000年以降は、女性の主体性を重視しつつ送り出し社会の文脈も視野に入れるようになった。さらに近年は女性たちの「生活者」と「弱者」としての両面を認めるようになり、その他にも送り出し社会の文脈を地域性ごとに細分し、地域が女性にもたらした影響に限らず、むしろ流出人口としての女性たちの地域への影響（胡2016）の議論も加わった。また、時代の推移に伴い国際結婚の動機変化の探究（張2019）や時代の激変に生じた新型の国際結婚も論じられ（郭2019）、多様な角度が提示されるようになってきた。

以上を踏まえ、本稿の視座は、近年の送り出し社会の文脈及び当事者の主体性を重視する視点の延長線上に位置づけていきたい。特に参照すべき社会学専門の賽漢卓娜と郝洪芳の研究を踏まえながら、本稿の着眼点を明確化していく。賽と郝はともに中国人研究者であり、母語で対象者とインタビューできることが重要な点であり、また両者とも中国人女性の国際結婚の専門分野で一連の研究がなされてきた点を考慮しても参照の価値が大きく、本研究との親和性が高いと考えられる。

まず賽の研究では、アジア人女性たちは受動的な「被害者」や「判断力喪失者」として扱われる従来の国際結婚研究とは異なる視座に立ち、これまでの「同化」研究を乗り越えようとしながら、女性結婚移民を主体性のある「行為者」として把握する基本的視点を提示した。また賽（2007）は、農村部に住む「中国人花嫁」3人を対象とした事例研究を通じて、送り出し側の社会的文脈に着目し、「国際結婚」のプッシュ要因を経済的要因、ジェンダー的要因、文化的要因などに整理し、女性たちが送り出し社会において多重に周辺化されていた状況を考察した。さらに賽（2011）は、農村に嫁いできた中国人女性結婚移民の「ライフストーリー」と長期の参与観察の結果に基づき、彼女たちの「国際結婚」を選択する過程、移住後の「農家の嫁」への適応過程、子供への教育戦略と将来の展望等といった一連の物語に立脚し、結論として女性の結婚移民の周辺化の解消に関して、受け入れ社会及び送り出し社会に提言を示している。すなわち、賽の研究は、従来の「国際結婚」研究への新たな視座を打ち出している。

一方、郝（2010）は、賽の研究では女性の出身国の経験や事情を重視し、結婚要因などを多面的に分析している点において「画期的な意義がある」と評価しているものの、女性たちの語りに焦点を当てて一方で、女性たちは「どの地域から来たのか」というマクロ的な問いが欠けている」と指摘した。それゆえに、郝の研究では、女性の出身地の特性を国の特徴に留まらず、

地域の歴史や経済的な特性にまで拡張すると同時に、調査対象者を細分化し、業者婚のルートにて来日する女性に焦点を絞り議論している。ここでは、日中国際婚における業者婚する女性の結婚動機に関して、日中国際結婚の「女性地域」の上位順から、残留孤児・残留婦人の歴史課題があるハルビン市方正県、日本企業の存在感が大きい大連市、人気な観光地として国際観光客の多い桂林市という三つの地域に分けて分析している。その上で、日本との関係の強さ、すなわち両国における「社会関係資本」が蓄積されていることが共通の特徴として挙げている。また、女性個人の動機として、日本での優れた生活という経済要因、失恋や離婚経験という親密関係の要因、日本の暮らし経験による日本への憧れという主体的要因が論じられた。さらに、郝(2012)は、3人の中国人女性の事例を通じ、母国の文化的背景、アイデンティティの変容や異文化適応などに着目しながら女性の主体性と葛藤を具体的に描き出している。

2. 本研究の視座

以上、賽と郝の論考を踏まえつつ、以下、本研究の視座を明確にしていく。第一に、ライフストーリー法には多様なアプローチがあるが、賽は語りを解釈し、ライフストーリー・インタビューを重ねることによって社会的現実を明らかにするという、いわゆる社会的現実(リアリティ)を重視するアプローチに立っている。また賽(2011)は「国際結婚の選択」、「農家の嫁へ適応する」、「次世代教育の戦略」との三つの人生段階を観察する際、各段階においてそれぞれ異なった女性5~6名に着目しているが、それは、賽のアプローチに深く関係し、個々人の人生の連続性より、国際結婚のメカニズムという社会的現実を見出すことに力点を置かれている。また、郝の研究では、女性たちの主観的な意味づけを重視するものの、分析の力点は業者婚のメカニズムに置かれ、その意味では、賽のアプローチに近いと考えられる。

そこで本研究では、賽と郝と同じくライフストーリーの語りを重視するが、目的は国際婚のメカニズムを明確にすることよりも、国際結婚の女性の主体性及びその形成の過程や変化に目をむけることにある。よって、語り手の深層の細部まで共有させるために、聞き手の存在を示し、さらに語り手と聞き手との対話の中に相互作用の過程を具体的に示す描写にしている。また、こうした対話的なアプローチでは、語り手と聞き手が話し合っている中で、お互いに刺激を与えることにより、意思確認の作業が同時に行われる。

第二に、人生連続性及び主体性といった本研究の着目点に関して、ここで説明を加えたい。賽の研究で個々人の各段階の連続性が捉えにくい点に対して、郝(2012)は女性たちの結婚までの経験から、来日後の夫婦関係やネットワークまでのライフコースを記述することにより、人生の連続性のなかで女性の主体性と葛藤を提示した。本研究では、女性の人生の連続性を念頭に置きつつ、来日前と後の経験の結びつきを重要視する。また、賽や郝の研究ともに、女性の主体性を個人のライフコース、すなわち家庭や婚姻内部との接点の中で描写されてきた。しかし、女性たちの主体性は家庭の枠内のみには存在するものではなく、その枠を超えて、生きる地域社会のようなより広い枠組みの中で主体性が発揮される可能性も示唆される。例えば災害などに遭遇した場合、その主体性が確認できることも考えられ、もしそうであれば、どのように反映され、どのように形成されてきたのか、というプロセスについて、本稿では注目したい。

従って、本稿では、東日本大震災を切り口として、こうした非常時事態における女性たちの姿に焦点をあてつつ、国際結婚研究で強調された女性の「主体性」と震災後における「災害弱者」の論調との交錯の中で、当事者の実情に寄り添いつつ、その内実を掘り下げてみたい。

以上先行研究の連続性の中から、本研究の視座を2点にまとめる。1つ目が、人々を通しての社会構造に重点を置くのではなく、社会構造・変容に向きあう個々人の暮らし、彼女らの生活戦略や思想に注目する。2つ目として、社会と歴史構造という外側から構築された集団的な国際結婚の女性像にとどまらず、当事者の語りを厚く記述する中で、内側から個々人の人生を連続的に捉え、さらに個人と生きる社会の関わりを見ていく。具体的には、女性2名のまなざしに着目し、東北独特な土地柄を踏まえつつ国際結婚で日本に移住する彼女たちの主体性を震

災の切り口から捉え直していく。

III 異なる来歴の「個々人」の語りから読み解く福島に結婚移住の中国人女性の生活実践

1. 調査方法と調査概要

本稿では、ライフストーリーの研究法を用いて、対象者へのインタビューに基づき、彼女らの人生を貫く全体的な特徴、及びその歴史的・社会的な背景を踏まえつつ、一人ひとりの人生を描写していく。ライフストーリー・インタビューでは、標準化された質問紙による質問-応答関係とは異なり、語り手の発話を阻害しないように配慮しつつ、比較的自由な会話に基づくインタビューが行われ、そのとき、語り手が「何を語ったのか」という語りの内容にややもすると関心が集中するが、その一方で、「いかに語ったのか」と、語りの形式にも注意を払う必要がある(桜井 2018: 37)。従って、本稿でライフストーリーを記述する際に、「語ったこと」に限らず、当事者自身の語りやしぐさなども重視する。

本稿の対象はそれぞれ中国東北地域の A 市と B 市出身の W 氏と Y 氏という 2 名の女性である(表 1)。W は「炭鉱都市」と呼ばれる地方都市の A 市で生まれ育ちの大卒者であり、地方市役所に就職してから、仕事関係で現在の日本人夫と知り合い、20 代後半に結婚し夫の実家である福島県の C 市に移住してきた。一方、Y は B 市の農村部出身がその後 B 市の都市部に移住した高卒生であり、中国で商売をしたことがあり、中国人の夫が病死した後、50 歳に友人による見合い斡旋で、現在の日本人夫と結婚して福島県の D 市の農家に移住してきた。全く異なった人生軌跡を辿って来日した 2 人であるが、そのライフストーリーを対照的に捉えつつ考察を行っていく。

インタビュー調査は 2021 年 3 月から数回をわたり実施した。質問は、生まれてから現在に至るまでのライフストーリー全般を扱っている。聞き取り時、国際結婚との接点を中心に置きながら、質問の順は拘らず、全体の話の流れに沿って聞き取っていた。また、調査対象者の心の深層までに触れるために、母語の中国語で調査を実施した。

表-1. 調査対象者の属性表

名	年齢	出身地	結婚年	子供	日本人夫の職業	現住地
W	50 代	東北 A 市	1994 年	息子 (20 代) 娘 (20 代)	公務員	福島県 C 市
Y	60 代	東北 B 市	1984 年 (1 回目) 2008 年 (2 回目)	元夫との息子 (30 代)	大工	福島県 D 市

2. 友好都市で縁を結んだ土地に生きる・活躍する—W

W は、1960 年代後半に「炭鉱都市」と知られる中国東北地方の A 市で生まれた。炭鉱区の技師である父が豊かな生活水準を保ち、母が W と下の弟、妹との三人の子を含めて家族の面倒見に専念していた。現在、A 市は産業調整政策によって凋落してきたとよく言われるが、子供時代の A 市はどちらかというと「都市の豊かさを実感してきた」と W は語った。地元の大学に進学した W は、卒業後自ずと地元市役所の財務局で就職した。「威張るわけでないが、その時、うち財務局の(女の)子は人気だわ」と語る W は、それなりに「目が高く」なり、相応しい結婚相手を探すのは難しかった。1980 年代、A 市は福島県の C 市と友好都市として連携し、日中政府間の活発した交流活動を機に、1990 年代に W は C 市役所に勤めている現在の日本人夫と知り合った。夫は大学の時、中国語を専攻として習ったことに加え、数年間の中国暮らしの経

験があるため、中国語が上手にできることで、普段 W とのコミュニケーションも中国語でスムーズに行っている。こうして、2年後二人は結婚した。特に注目したいのは、当初2人の結婚が、「友好都市で縁を結ぶカップル」とのタイトルで日本側の新聞にも取材されたことである。親が空港まで見送ってくれた当時の気持ちについて、「『生離死別⁽⁴⁾』とは何か、その時に始めて分かった」と W は語った。それにしても、「腹を決めて、中国の全てを捨てて」日本に移住する決意には、W の強い意志がある。

＊：（筆者発話、以下同）Wさんは、当時の時代ではなかなか条件が良いのではないですか、どうして中国を離れたのですか。

W：いい条件ですよ。みんなもそう言っていた。でもね、その時、わたしが結婚したくなった。『大齡青年』の年にもなったし。それで、いい結婚相手も見つかったし、しかもわたし自身が選んだ人。だから、その人について日本に来たんだ。

しかし、母国を離れて来日するのは W にとって「予想外」であり、その時、日本語ができない W と日常に話し合えるのは夫しか誰もいなかった。「テレビを見ても分からない、新聞も読めない。中国から持ってきた何冊かの本を繰り返して読んでいる。友達もいなかったし、毎日家で彼が帰るまでずっと待っている」という。こうして、W は来日後の生活に慣れなく、毎日泣き暮らしていた。こうした日々は長く続くことなく、数ヶ月後 W は妊娠した。その後間もなく、体質が弱いことで W は入院し、出産後数ヶ月までも病院で過ごしていた。にもかかわらず、それは意外と当時の苦境を打開するキーになった。病棟の六人部屋に住むので、「家のように独りぼっちじゃない、せめて人がいる」ことで、漢字を書いて他の妊婦と交流したり、中国からの研修医者が毎日お見舞いに来たりすることで、W にとって大きな慰めになった。退院後、息子が側にいることで W の寂しい気持ちが緩めてきて、2年後、娘も生まれ、W は徐々に子育てのことに集中することになった。こうした最初の適応期における自分の思いについて、こう語ってくれた。

＊：その時、子育てに集中してからホームシックなどは収まってきたのですか？

W：もう母親になったから、しっかりしないといけない。子供は母親の心と繋がっているの、母親が泣くと、子供も泣くよ。後はね、友人から教えてくれたんけど、わたしが毎日泣いている時期、うちの彼（旦那）も泣いていた。こうしたわたしを見ている彼は苦しんでいたと、その時初めて気付いた。…だから、自分のことだけを考えるのはダメ、他人のことも考えないといけないのよ。

＊：辛かったんですね。馴染みのない異国生活にまだ慣れてこないのに、すでに色々考えなきゃ…

W：うん…。一番最初に学んだ日本語はなんだと思う？ 「我慢」（笑）。病院で導尿される時はあったね、それは痛かった。女性の先生は、「ガマン、ガマン」とずっと言っていた。「ガマン」って、という意味なのか、うちの彼に聞いてから初めて知った。「日本に来て、ガマンしかないの？」って（わたしが）聞いたら、「嫁姑問題にガマン、職場でガマン、みんなはよくこの言葉を使うのよ」って（彼が言った）。

精神的な回復ができれば、W は子育てをしつつ就職の前期準備に自ら努力し始めた。その最初の一步は、車免許を取ることであった。言語の壁で大変苦労した。お昼に教習所で、夜に子供を幼稚園に迎えに行ってきたから、免許知識の勉強を始めていた。子供が泣くと、「和室にいっぱいおもちゃを並んで、子供が（わたしが）見える所で勉強した」という。その後、車免許を取れたことは、W に大きな自信を与え、「またほかに何か学ぼうか」と考え、介護資格を取りに学び始めた。それは普段自分の暮らしにしっかりサポートしてくれる優しい義父母への「恩返しのためだ」と W は語った。しかし、子育てと両立にするのが容易なことではなく、「娘が、熱が出て、ひとりぼっちにさせないように娘を連れて介護学校に行つて、（娘を）そ

ばに寝させて、わたしが勉強していた」、というエピソードがあった。「子供 1 人の面倒を見てあげる」と実家側も義父母側も子育ての負担を分担しようとする意欲があったが、W は「自分で育てた子は自分と親しんでくる」や「2 人の子が一緒に暮らし成長していたほうがいい」という理由で断わった。

子供が小学校に入ってから、W も計画してきたとおりに社会に入って仕事し始めた。しかし、日本語が話せないことで仕事探しは簡単ではなかった。そうしたら、中国に関わる仕事をしようと、W の当時の考えであった。音楽教室に行き、「今振り返って考えたら不思議」であるほどの勇気を持って、「ここで中国語教室をやり始めてみませんか」とそこの社長に尋ねた W は、来日後の初仕事を勝ち取れた。その後、中国語先生として複数の仕事をやっているが、この最初の仕事に対して、W は非常に大切に、長い間、給料が低いとしても、学生が 1 人しかいないとしても、現在までもやり続けている。

仕事のほか、W が多様なボランティア活動で活躍している姿は読み取れた。まずは 2011 年震災前から始まった中国残留孤児福祉施設でのボランティアであった。施設の人々はほぼ中国語しか通じらない高齢の方であり、行政からの援助を受けつつ生活を送っている。戦争の陰が人生に色濃く映されている彼ら・彼女らに対して、「かわいそうな人だ、手伝うことができれば手伝うわ」と W は声をおさえて呟いた。最初は医療通訳や生活相談に限られたが、後は日本語の日常会話教室もやり始め、長年関わっているなか、現在は高齢者たちの日常的な細部までも自ずと配慮していくことになった。日常的な例を挙げると、「健康診断のために朝ごはんを食べないでねって言っとくけど、彼らの記憶力が悪いので、(わたしが) 当日電話をかけて何回も確認しないと、食べちゃうよ(笑)。糖尿病の人もいて、毎日何食食べたか、どれぐらい食べたか、一々と聞かなければならない」という。

また、2011 年の東日本大震災の際、地元の中国人グループを馴染み込む W はさらに震災直後の混乱期に、「撤僑行動⁽⁵⁾」と地元工場の中国人研修生の帰国に力を尽くした。震災直後、大使館からの避難の誘いがあったが、「子供とうちの彼はまだここにいるから、家を捨てるのはだめだろう」という理由で W は断った。留まり続けた W は、福島県の「撤僑行動」の連絡作業にサポートし始めた。実は「華僑⁽⁶⁾」向けの引き揚げ行動であったが、10 年前に華僑華人のネットワークは未だ整えなく、「華僑」なのか「華人」なのかははっきり区分できなかった。インターネットも発達していない当時、「とりあえず一人一人に電話をかけて安否連絡をすること」で、その月の電話代は 5 万円もかかったという。また震災後、地元工場における中国人研修生たちの帰国避難要請は工場側に拒否され、双方の立場の違いによる対抗問題が出で、それを解決するという大使館からの依頼を、地域の中国人グループ委員会は引き受けた。W は夫のサポートを受けつつ、日本語のできない研修生の代わりに、工場側と交渉し、その後無事に解決し、バス一台で研修生たちを空港に送らせた。この経験を通じて、「自分なりに他人を手伝いすることはもったいないなあ」と W は考え始めた。

仕事関係で福島に留まり続けている W 夫婦二人だが、実は避難か否かについてずっと躊躇していた。子供達の健康を熟慮した結果、W 独りが子供達を連れて中国の実家に避難することにした。「避難」と言ったにも関わらず、実は同年の 4 月になった間もなく福島に戻り、家族四人が再び集まってきた。その 1 ヶ月間未満の帰国避難に関して、W はこう振り返って語った。

W：実家の元同僚は親切に迎えに来てくれた。健康診断も手配してくれた。…その日、みんなと集まっている時、急に同僚が慌てて部屋に入って、向こう(C市)市役所のエレベーターが余震で落ちてしまって、中にいる何人かが亡くなったって…(のどが詰まらせる)…うちの彼はそこにいるかな。電話何本かけでも繋がらなかった、頭が真っ白になった。その後、安全報告の返電が来たけど、大泣いたわ。…子供もパパに会いたくなるから、もう大丈夫そうで、福島に戻った。

震災後、W は「外国人としても何かしよう」と考え、「福島振興」という呼びがけに積極的に応じ、福島の歴史地理や名物に関する知識を学び、「お客が来たら福島を案内する」という

思いで相関資格を取れた。それを機に、多様な地元 NPO 活動に参加し、ボランティアとして働いている。さらに、震災トラウマに苦しんでいる人々向けの心のケア電話相談で、W は週に一日間ボランティア相談員として、見ず知らずの人の悩み相談を受けている。筆者が本稿を執筆する現時点までは、もう 9 年間続けていた。現在は震災記憶の相談に限らず、新型コロナパンデミックの心理相談や日常的な悩み相談もよくあったという。

＊：他人と話し合っているなかで、W さんにとってどんな影響があったのですか？

W：どこかの県の留学生からの話を聞いて、どうやって手伝おうか分からなくて、言葉で慰めるしか何もできなかった。電話を切ったら、あの子の問題が未解決のままで、あの子も消えちゃった。こんなようなことで、何日間も退屈していたこともある。…後、相手にののしられたこともある。…

＊：電話相談で溜まってきた退屈は、自分で紛らわしてなければならぬですね。どうしてそのボランティアを続けてきたんですか？

W：震災後、身近な人々の孤立無援の様子を見て、やはり自分ができる限りのことをやってみたい。日本に來たばかりの時も、そういう無力感を味わえたのだ。何も分からない、聞こうとしても誰に聞くか分からない。今、わたしが色々なことを知っているから、じゃあわたしからみんなを教える。

こうした W の充実した生活と活躍に筆者は思わず胸が熱くなった。しかし、「自分を暇にさせたくないだけだ。日本では寂しいから」と、W の反応は意外に冷淡であった。その内実は何であったか、W の人間関係には多かれ少なかれ参照すべき点が内包されているだろうと筆者は考えている。

まず実家の家族に年に一回の面会機会があり、それ以外の日常にも電話で頻繁に連絡している。W によると、1990 年代に週に 2 回家族と電話していた。その後 Skype が出て、2 日間一回の頻度に連絡が高まり、技術がさらに進展してきた現在はほぼ毎日スマホ視聴電話で連絡しているは分った。母国を離れてから連絡が薄れていくことはなく、かえって濃厚になってきた。その背後には、科学技術の進展に恵まれたことに加え、さらに「最近お父さんが入院し、妹と毎日何通も電話していた」という語りで見えてきたように、高齢になった両親に親孝行をしたい気持ちが大きい。

また家族だけではなく、中国にいる友人との繋がりも W は大事に維持してきた。殊に、「日本から帰国した友達」との繋がりであった。話の途中、W は手元の小さなダウンコートを見せてくれた。以前福島に留学した子が残してくれたものである。「もう中国に帰ったが、これを見て彼女のことを思い出すから、捨てられないわ。先日にも彼女に電話した」という。日本にたくさんの知り合いがいるが、彼ら・彼女らとは仕事上の付き合いしかない。一方、中国にいる昔の友人とは、異なった空間で暮らしていることで、気持ちや常識が共有できなく、話し合っているなかで時々寂しさも感じてくるという。故に、一番親しんでいるのは「日本暮らしの経験が共有できる帰国した友人」と W は語った。

3. 異国の土地で「幸せ」を追いかけている—Y

「いつも妹と弟たちを見守っていたの」。1950 年代後半に中国東北 B 市にある農家で生まれ育った Y は、小さい頃から子供 6 人中の長女として、農事に忙しい親の代わりに、下の兄弟姉妹を見守ることを強く意識していた。父は農業機械工場に働き、母は「菜舎」に野菜を栽培し、両親 2 人とも集団生産に働いていたが、実際は「(子供達は) お尻が裸のままで、家で遊んでいる」といった貧しい暮らしを送っていた。高卒までは学校に通っている Y は、13 歳から家計に手伝っていた。1984 年、知り合いの紹介で、Y は国营製造所の中国人夫と結婚し、翌年に息子を産んだ。「そして、1985 年 11 月に『下海⁽⁷⁾』した」と、Y は今でもその日付をはっきり覚えている。当初、夫の仕事が安定したことと見られていたが、実際の給料は親孝行に義母に渡す分を引いてから、残った分では「暮らしもできない」という。仕方なく、Y は息子を義父母

に頼み、社会に入って商売を始めた。1990 年代に入った間もなく、夫の勤め先が運営の問題でうまく進まず、夫はリストラさせられた。一方で Y の場合では、商売が好調で、お金を稼いで住宅を一括で購入した。こうして、Y は家の大黒柱になっていった。しかし、商売を始めるという人生の節目に対して、Y は「後悔した」とネガティブに評価した。

Y：聞いてね。「女人当家，房屋倒塌（女が一家の大黒柱になれば、家屋が崩れ落ちてしまう）」。商売をすればするほど、気性が強くなった。男はこういうのが嫌なんだ。しょっちゅう喧嘩していた。…子供が小さい頃から祖父母と暮らしているから、わたしになつてくれないのよ。

2000 年に、中国人夫が病死した。義父母側の家族は、若くうちに夫が無くなった Y をかわいがったゆえ、「（あなたが）やりたい事があつたら、何でも支持する」と伝えた。こうして Y は商売をやり続け、ヘルパーとドライバーを雇って生活を送っていた。その生活は友人の H からの連絡がきたまでずっと続けていた。女性 H は幼い頃からの友人であり、その後秋田県に嫁いだ。H は偶然に当時中国人嫁を探している K に出会い、仲介費のために K のためのお見合い幹旋を引き受けた。K は福島県の海辺に位置する D 市の大工であり、長男であり盲目の母親と一緒に暮らしている。当時の K はもう 50 代後半になり、未だ嫁さんが見つからなかった状態である。その後、Y と面会に K は中国にきた。息子も食事会に出席し、食事が終わった後、「この人は頼りになれる人間だそうだと Y に言った。こうして、義父母と息子から支持をもらい、2008 年に Y は K と結婚し D 市に移住した。それに関して、Y はこうして振り返った。

*：H が誘われたから来たのですか？

Y：…めっちゃいい人、嫁さんが欲しいって彼女（H）はこう言った。でも、何のために行くの？日本語も全然できないから、すぐ断った。…日本はいいところだよ、草も生えない（という程繁栄な所）のよ、って彼女はずっとアピールしていた。そうなの？ そんなことあるわけないだろう。

*：大げさですね（笑）。

Y：（相馬市に）着いてからさ、あれが嘘だとすぐ分かった。どこに行っても草だらけじゃん（笑）。

*：でも、その時中国での生活も良かったんですね。なぜ日本に行きたくなったんですか？

Y：…手相を見てもらった人にはね、あなた、50 歳の時、また婚姻がある、と言われたんだ。その時、ちょうど 50 歳だった。当たったね、あの人。…わたし、中国で商売をやったから、貯金あるよ。みんなは稼ぎのために日本に来るけど、わたしが違う。年を取ってからさ、誰かがそばにいてほしい、誰かと一緒に暮らしたい。お金のために来たんじゃない、「老伴」（老後の伴侶）がほしいから。

来日後、Y は専業主婦として義母を介護しつつ、スーパーでのバイトもやっている。しかし、過疎地域の農村生活に慣れることは Y にとって大きな課題になった。時間つぶしのために、「家手前の道路を沿って 1 人で何時間も歩いてた。それにしても 1 人にも会えない」という。「一体何のためにここにきたのか」と Y は繰り返して自分に尋ねた。

*：最初は慣れてこなかったんですね。

Y：東京に旅行したことあるけど、そこは賑やかだね、ここは全然違う。…日本着いたら、K の家に行くかなと思って、違う。近くの旅館に泊ませた。一週間も泊ませたよ。ということそれ？ わたしが家族だとは思わせないのだ。

*：そんなことないでしょう…

Y：そういうことだよ。…それからずっと考えて、ようやく自分を説得した。せっかく日本

に来たから、日本の家はどうか、日本のものはどうか、人に聞かれると答えられるぐらいにならないとね。

また、新たな家族と信頼関係を築いてきたまで、何年もかかった。盲目に認知症の義母は「近所にも知られるほど厳しい」人であり、家事がうまくできない場合に、Yの髪を引っ張ったり、ばかり殴ったりすることはよくあったという。こんな時、Yは避けるしか何もできず、こうして長年介護し続けた。ある日、夫の弟は訪れ、床に漏れた義母の尿を拭いたYの様子を見て、その後Yに対する態度が一変した。「(弟は私に)丁寧にお辞儀した。私がそこまで介護してくれるとは思わなかったのかな」とYは語った。こうした義母は、今際に意識不明になり、誰が呼んでも反応しなかった時、長年に介護してくれたYの声だけに反応してくれた。「自分の息子さえ分からなくなったがけど、わたしの声なら分かってくれた」という。

しかし、夫のKに対して、Yは「優しい」と評価した。Yによると、近所の中国人嫁の日本人夫は、普段お小遣さえも嫁にあげない。それに対して、Kは「話も全部聞いてくれるし」、一緒に中国に旅行する際、旅費も全部支払ってくれた。「わたしの性格が明るいから、一緒に暮らしてから、あなたも幸せになっただろう」と、Yは笑いながらそばに座っているKに聞いたら、Kは微笑みを返した。「今は幸せだ、本当に幸せ」と、Yは強調した。

来日後間もなく起きた東日本大震災は、Yにとって人生初の地震体験であった。家が揺れている光景を見て、Yは恐怖を感じるよりも、「見たことないから、それを面白そうに見ていた」。地震当時、Kが海辺に出勤し、家にはYと義母しかいなかった。しかし、夜になっても、Kがまだ帰ってこなく、Yはどんどん不安になった。

Y: 電気も消えたし、雨か雪も降ってきた。寒くて暗くて、徐々に怖くなった。旦那がまた帰ってこない。自転車に乗って旦那の会社に向かった。どこでも真っ暗、途中で自転車が倒れた橋にぶつかって、自転車のハンドルが胸に撃った。その瞬間、自分が死んだのかと思った。呼吸もできなかった。でも旦那を見つかなきゃいけないと思った。深呼吸を繰り返して、ようやく息返した。ひざにはその時の傷が今も残っている。…会社に着いたら、ボディランゲージでなんとか言いたいことを伝えた。「家に帰って待つて」と言われた。仕方なく、家に戻って、ラジオでニュースが流れていた。同じニュースを複数の言語で繰り返して流れていて、その中国語の部分聞き取れた。なんか、海辺には、60歳の大工が津波で死んだと。ちょうど旦那が60歳で、まさか、もう死んだのかと思いながら、夜明けが来た。

幸いなことに、Kは津波の間際に建物の2階に一晩中避難し、翌朝に自転車で戻ってきた。震災後、周りの中国人が相次いで帰国した。「Kはまたここにいるから、盲目の義母もここにいる。わたしは離れたら、彼らはどうなるんだ?」という理由で、Yはここに留まり続けた。しかし、知り合いの中国人の仲間が帰国したいというので、Yは夫に頼んで、KとYの夫婦は出来る限り彼らの手助けをした。震災直後の混乱期には、Yの家が特に厄介に思われたことはなく、Yは庭で家庭料理を作り、国籍を問わずに近所の人々にお弁当を配った。また、震災で家を失った中国人の仲間を、Yは自宅に泊ませた。さらに、Kとともに自発的に近隣の家の片付けに手伝った。それについて、「みんなも感謝してるよ。近所に聴いてみて。Kの嫁さんって聴いたら、知らない人はいないのよ」とYは誇らしく語った。また、震災後、家の後ろに、真っ白の死体がたくさん目に映り、「津波で流れてきた、ほぼ裸だった」という。その時、記者が写真を撮っている様子を見て、Yもカメラを持って震災後の風景を記録した。しかし現在は当時の写真一枚も残されていない。「見ると悲しくなって、全部削除した、もう見たくない」との理由であった。

人間関係について、Wと同様に、Yは中国の家族と日常的に濃厚な連絡を維持している。「父の歯磨き粉も日本産だよ」という。現在のYは「美味しい物を食べたら、使いやすいお薬を使ったら、直ぐに両親を思い出し、両親や家族にも試させたい」という強い気持ちで、Yは月

に一回というように頻繁に、細かな日常用品まで国際郵送し続けた。新型コロナ感染症が流行する前、Y は毎年 K と一緒に中国に戻り、2 ヶ月間も過ごしていた。それは中国の家族十数人と一緒に旅行するためであった。理由に関して、「父と母がいれば、『家』と呼ぶが、父と母がいないと、『故郷』しか言えないのだ」との語りにより、「親孝行」の思いは強く読み取れた。昨年母親が亡くなり、コロナで帰国できなかった Y は手書きの手紙を妹に送り、自分の代わりに母のお墓前に読んでもらった。さらに、父親に毎日電話している。「姉妹兄弟の中、誰かが父を自分の家に迎えて住ませると、彼（彼女）にわたしはお金を送るのだ」という。こうして、日本にいる Y は長女の姿勢を保ちつつ、自分なりに親孝行を続けている姿が読み取れた。

それに対して、D 市の地元の中国人女性との繋がりに関して、「知り合いだけど、彼女らとは一定の距離を維持している」と Y は答えた。地元の中国人嫁は、来日後のより良い生活を求めるために、離婚・再婚を繰り返し、1 人の日本人夫とずっと一緒に暮らしているのは 5 人以下であるという。こうした中国人嫁同士に対する Y の否定的な態度が読み取れた。また、地域の華人華僑会が開催する年に一回の集まりがあり、知り合いがそこにいるため、「呼ばれたら行く」という頻度で参加している。一方、バイト先で唯一の外国人として、休憩の時みんなが日本語で話し合うが、Y はほぼそれに参加しない。「噂と悪口ばかりだ、話していることは分かるけど、イヤフォンをつけて分からないふりにする」という。バイト以外の時間には、同じく在日中国人女性の友人とは、何時間をかけて電話で雑談することについては、Y が楽しんでいる。今自分の状態について、Y はこう考えている。

*：中国に帰るとか、考えたことがありますか？

Y：それは良くないよ。わたしはね、日本に働いて、日本政府に税金を納めるだろう。中国政府には税金一元も納ったことないのだ。もしこんな時帰ったら、例えばお母さんが亡くなった時帰るとね、国家に負担をかけるだろう。それはダメなことだ。

*：そう考えているんですか。それでは、日本と中国、どこにいる時は帰属感が感じてくるのですか？

Y：「一体何のために来たのかな」、友達とよく話し合ったわ。今はどこにいても揺らいでいる感じだ。日本にいても中国にいても。心が定まらない。

VI 家庭内部から地域社会へ：国際結婚の中国人女性の主体性を巡って

1. 震災後の行動から顕著化された地域を支える女性の姿：「災害弱者」を超えて

本稿で着目した W と Y の 2 人の女性は全く異なった人生を歩んでいる。W は都市出身の知識人としてボランティア活動に熱心であることにに対し、Y は農村出身の元商売者であり再婚者であり、浮き沈みの激しい人生を経験してから何よりも家庭を一番大切に考えている。こうした異なった二人であるものの、彼女らの震災後行動に焦点を絞ると、従来の「弱者」と違う側面が浮き彫りにされる点では同様である。

まず震災後に世間から最も批判されていた「外国人の日本脱出」に関して、本稿で見えてきたのは、日本を離れるルートや機会があった前提とするなかで、二人の女性とも留まり続けることを選んだことである。被曝のリスクに迫られ、中国では実家や友人の後ろ盾があったとしても、「母国に帰らない」を選ぶのは、当時の状況に鑑みれば、より難しい道を選ぶことを意味するのではないだろうか。それは単なる家族と離れたくないから留まったというような単純な思考ではなく、震災後の自発的行動から見えてきたように、彼女らはこの先の困難を覚悟したうえで決めたのだろう。W は大使館からの避難の勧誘を拒否した後、「撤華活動」に力を尽くし、地元工場の中国人研修生が帰国できるように交渉し、こうして地域に生きるほかの中国人の避難活動に大きな役割を果たしていた。震災直後に限らず、心ケアの電話相談や NPO 活動といった 10 年間の福島復興活動において、活躍している W の姿は輝いている。一方 Y の場合、W のように公的な組織に勤めることはないが、自転車一台で真っ暗の震災直後廃墟に夫を探し、近隣に食事や宿泊を提供し、地元の中国人嫁が帰国できるように手伝い、こうして自力で素朴

ながらも身近な人々を支えていた。

したがって、行動的にはフォーマルとインフォーマルの差異が見えるが、それでも二人とも自分なりに震災後の混乱期に、地域住民に即時のサポートをしながら貢献していた。特に、地域の中国人同士に、W と Y は架け橋のように人脈を生かして支えた。従来の「災害弱者」に關して、言語的な壁による情報収集能力が低いという意味合いから、外国人は概してこうした議論の渦中に置かれている。しかし、W と Y は震災当初、2 人とも意思疎通もできない日本語レベルであったものの、自分の行動を通じて他者や地域の支えになった。

翻って、震災はこうした女性たちにとってどのような存在なのだろうか。震災前、W と Y とも家庭に深く関わって暮らし、震災を節目として、その後に移住地域と関わりに関する語りが一気に増えてきた、と強く感じ取れた。W の場合は、地元華僑華人組織のネットワーク作りに取り組み始め、多様な福島復興ボランティアを始めたきっかけは 2011 年の大震災である。震災の非常時の状況において、W は「外国人だとしても何かしよう」との思いが生まれた。それは恐らく、震災の状況で国籍や言語などの境界が薄れていき、震災を生き抜く・震災前の日常に戻るといった課題は地域住民の間に共有されていた。この時初めて、「日中社会の境界人」として「地域のよそ者」として生きてきた中国人女性は、地域に馴染み込むことができる拠り所を見つけたのだろう。さらに、中国人研修生事件の経験により、W は「自分なりに他人を手伝いすることはもっとしたいなあ」と語った。それと同様に、近所が自分に対する感謝や評価に、Y は誇りに思った。いずれにしても、これまでは「外国人」と「女性」という複合的な脆弱性を持つ国際結婚の女性は、震災において地域の他人と平等な立場に立てることになり、それを機に地域を支え合っており、こうした姿は地域の人々に評価された。震災の残酷さと言うまでもないが、角度を変えてみれば、こうした非常時の場だからこそ、女性たちは初めて「災害弱者」を超えた姿を見せるのではないだろうか。この意味では、震災後の実践により、女性たちにとって、地域に受け入れられ、地域に馴染み込むことが可能になった。従って、序章で触れたように、女性たちの主体性は家庭の枠内のみに存在するかいなかの問いに關して、ここで答えが明確に見えてくるであろう。

2. 人生経験を裏返し、行為主体性に導いていく

先述のように、震災を機に、二人の女性は「災害弱者」を超える力強い側面が顕著化されてきたが、問題はこの力はどこから得たのかという点である。Uekusa ら (2017) によると、移民や難民が移住や戦争といった辛い経験があるため、自然災害に直面する時、彼らは脆弱性よりレジリエンスの側面が露呈すると説明している。それと同様に、本研究においても、その力は彼女らが人生経験を踏まえつつ長期的に蓄積してきたものだろうと筆者は考えている。他方、常田 (2011: 20-25) は、ポストコロニアルのなかで、近代と伝統のなかで生きる現代インド女性の生き方を論じる際、「行為主体性 (agency)」という言葉を用いている。「主体」という概念は、「行為の主体 (subject of action)」と「(構造への) 従属 (being subject)」という両方の側面がそもそも含んでいる。しかし、こうした権力的な構造の中での存在という側面と、人間の自律的な意思決定という側面とを、統合的なものとして理解できないという限界がある。常田によると、行為主体性という枠組みでは、構造に従属するのか抵抗するのかといったことより、行為主体は現存する関係性をいったんは引き受けながら、同時にその関係性を再調整に向けて働きかけるということに注目するという。そこで本研究においても、行為主体性の枠組みで、W と Y の人生を振り返ってみたい。

来日前の Y は、夫の病死、適齢期を過ぎるといった地域社会構造による再婚困難の苦境に直面している。しかし実際に、「老後の伴侶が欲しい」という強い思いが Y の心の奥に秘めていた。こうした状況において、必死に抵抗するよりも、Y は元夫の家族と深く関わりながら黙々と商売をやり続けていた。こうして、「(あなたが) やりたい事があつたら、何でも支持する」と元夫の家族からのサポートを得ることができ、さらに日本への結婚移住も順調に進んだ。続いて過疎地域に生きる孤独感や義母からの非難の問題に対し、Y は自ら調整しながら、中国の家族と頻繁に連絡したり義母を丁寧に介護したりと、日常生活実践の中しなやかに工夫していた。

それは、義母の受け入れと義弟の尊敬を得たことに導いた。一方、W は来日初期、日本生活の孤独に耐えないが、妊娠入院を機に、病棟の人々との付き合いを増え、その後さらに子育て、義父母への恩返し及び将来就職のために、車免許や介護資格を取ることに専念し始めた。外国人移住者である家庭主婦として、当初の W は構造的に社会と切り分けされた場面に立っていたと言えるだろう。しかし、猛反対するよりも、W はその当時の身分を引き受け、子育てと義父母の親孝行といった「本業」に努力しつつ、そのうちに免許、資格や言語といった技能を少しずつ身につけていた。こうした経験の積み重ねの過程があったからこそ、W はその後社会に進出・活躍することができたと推察される。

以上のように、「移住元社会で周辺化される」あるいは「移住先社会で再び周辺化される」(賽、2011)といった国際結婚の中国人女性の苦境に対して、W と Y の経験にもあるように、彼女らの対応には行為主体性が見えてきた。すなわち、生きる社会による構造的な制限に疲弊し抵抗するより、彼女らは現存する資源や人との関わりといった関係性をいったん引き受けながら、日常の隅々における実践の工夫を通じて自分の能力を蓄積したり、しなやかにその関係性を微調整している仕組みが見える。一見すると、「逆来順受⁽⁸⁾」ではないかと思われるかもしれないが、実際はそうではない。彼女らの立場を鑑みてみれば、中国の実家から強いサポートがあり、その前提のなかで日中の狭間に実践しながら自分らしい生き方を模索しているのは、こうした女性たちの自由意志である。加えに、何らかのものを犠牲して、構造的なものに抵抗することを強いられて個人の主体性を強調するよりも、むしろこうした柔軟な実践へのまなざしの中から女性たちの知恵が見えてきたと考えている。さらに、こうして女性たちは、自身が模索してきた人生経験を裏返した中に不思議な力が生まれ、改めて非常時に地域に還元したというプロセスも把握出来たのである。

V おわりに

国際移動の活発に伴い、災害リスクが増加している現代社会において、移動と災害といった重層する不確実性のなかに生きている人間の生き方を考えるために、本稿は一石を投げることができたと考えている。本稿では、国際結婚と 2011 年東日本大震災の議論を交差させ、国際結婚で来日移住の中国人女性を対象にし、二人のライフストーリーの描写を通じ、国際結婚の社会的文脈を踏まえつつ、震災に刺激される女性たちの主体性を論じた。

上記に、女性たちは自身の人生経験を裏返した中で不思議な力に転換したと論じたが、しかしながら、現在の彼女らは決して「強者」と言い難いのではないかと筆者は考えている。それは、彼女らの精神的な支えと物理的な身の拠り所とは、実際に分断されるからである。本稿で取り扱った 2 人の女性は、移住後同化されるよりも、実践の試行錯誤のなかで独特な生き方を定めてきた。彼女らのライフストーリーから、日本での人々と一定の距離をおいて付き合い、一方で母国社会との繋がり維持に心を込めて工夫してきた側面は明らかにした。W の場合、実家の親は子育てを分担しようとする姿や震災直後に子供を中国で避難させることから、母国からの随時の支えが読み取れた。また Y の場合、高頻度で家族と連絡し、細かい日常用品までも中国に郵送し、定期的に家族旅行を行うことを通して、身が日本にいたとはいえ、最大限に中国の家族とリアルタイムで生きている姿が読み取れた。こうして一見すると、彼女らは移住社会で既に独特な生活哲学を見つけ、自分なりに日中の狭間に生きているようにも見える。しかし、どのような綺麗な表現があったとしても、日中のどちらにいても、彼女らの帰属感が感じられない事実は存在しているのである。外観的には、充実した暮らしを送っているように見えるが、「日本では寂しい」と「どこにいても心が揺らいている」といった、W と Y のそれぞれの深層の声が脳裏に残る。

こうした女性たちにとって、構造の縛りよりも、個の深層にある心の揺らぎといった脆弱性は「弱者」の新たな内実として見えたと言えるかもしれない。こうした脆弱性は、無論、本稿で取り扱った結婚移民の女性に限らず、個人化が進む現代社会において、適応の対象は拡張していくだろう。ゆえに、それを今後の課題としてさらに進める必要があると考え、研究をさら

に進めていきたい。

注

- (1) 2021年11月24日に最終閲覧。
- (2) 「花嫁」あるいは「外国人妻」という呼び方には、支配されるニュアンスが多かれ少なかれある。それに対する批判は先行研究ではしばしば見られた。本稿では、先行研究を引用する際のみにそのまま「花嫁」、「外国人妻」という言葉を使うことになった。その以外は当事者の主体性を強調するために、「結婚移民の女性」、「女性たち」というように表現する。
- (3) 歴史の印が人生に投影された人々であった。彼らに関する正式な記載があるが、彼らの生活を援助している W の言葉によると、彼らはこうした人々であった。「…ほぼ小さい頃から中国に生きてきて、日中外交正常化になってから、彼らは 40 代 50 代の頃に日本に戻ってきたのだ。小さい頃に日本人の親に連れて中国に行った人もいるし、中国で生まれた人もいる。親が戦争で中国で亡くなって、彼らは『孤児証』をもらって、それが日本人身分の証しだ。ほかの証として、例えば、子供の頃日本でワクチンを接種したことがあり、彼らの腕に残った『ハナ（接種の跡）』からも分かる、中国のと違うから。彼らが日本に戻ってから、政府からの援助を受けながら暮らしていた。…みんな高齢の方で、以前には数十人や百人以上もいたが、現在の援助対象は十数人しかいない。その中、一番若いのは 70 歳以上 80 歳にも近いのだ。…特殊でかわいそうな人々だ。中国で暮らしていた時「日本鬼子」と呼ばれて、ようやく日本に戻ってきたら、日本社会に馴染みこまなかった。中国の飲食習慣に慣れたので、家の食卓には今でも中国東北の料理が並んでいる。教育を受けたこともなく、中国人でも日本人でもなく、彼らは苦しかった。」
- (4) 中国語の表現であり、「生き別れ」を意味する。
- (5) 中国語の表現であり、「中国人居留民を引き上げる非常時の政府活動」を意味する。
- (6) 華僑と華人の違いに関して、鐘（2017）の定義によると、前者は中国の国籍を持つ中国系の居留民であり、後者は受け入れ国の国籍を取得した中国系の人々を指す。
- (7) 中国語の表現であり、「商売を始めた」を意味する。
- (8) 中国語の表現であり、「理不尽な取り扱いや要求に対して逆らおうとせず従う」を意味する。

引用・参考文献

欧文文献

Uekusa S, Matthewman S. 2017 “Vulnerable and Resilient? Immigrants and Refugees in the 2010–2011 Canterbury and Tohoku Disasters,” *International Journal of Disaster Risk Reduction*, 22: 355-361.

和文文献

赤坂憲雄、脇坂敦史 2019「変わり続け、問い続ける、『異人=よそ者』という存在 インタビュー—学習院大学文学部日本語日本文学科教授 赤坂憲雄」『CEL: Culture, energy and life 特集 地域と時間をつなぐ:「よそ者」の役割とは』123、2-7 頁。

郭笑蕾 2019「中間層家庭出身の女性の国際結婚移住における移動経験のあり方: 日中国際結婚移住女性の語りから」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要: 社会学・心理学・教育学: 人間と社会の探究』87、37-50 頁。

桑山紀彦 1995『国際結婚とストレス: アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族』明石書店。

胡源源 2016「中国における国際結婚移民の受容と家族維持戦略—東北地区の H 県を事例として」『21 世紀東アジア社会学』8、107-123 頁。

賽漢卓娜 2007「中国人女性の『周辺化』と結婚移住送り出し側のプッシュ要因分析を通し」

- 『家族社会学研究』19(2)、71-83 頁。
- 2011『国際移動時代の国際結婚: 日本の農村に嫁いだ中国人女性』勁草書房。
- 2014「国際結婚した中国出身母親の教育戦略とその変容—子どもの成長段階による比較」『異文化間教育』39、15-32 頁。
- 桜井厚、小林多寿子 2018『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房。
- 笹川孝一 1990「『アジアからの花嫁』の日本語学習環境と『社会教育』(現代的人権と社会教育)」『日本の社会教育』34、47-57 頁。
- 鍾家新 2017『在日華僑華人の現代社会学—越境者たちのライフ・ヒストリ』ミネルヴァ書房。
- 鈴木江理子 2012「東日本大震災が問う多文化社会・日本—『共に生きる』ために」鈴木江理子 編『東日本大震災と外国人移住者たち』明石書店、9-32 頁。
- 張月 2019「日本の都市部に嫁いだ中国人女性の結婚の動機: 時代による変化の視点から」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』135、57-75 頁。
- 2020「日本に嫁いだ中国人女性の結婚の動機: 都市部に嫁いだ女性と農村部に嫁いだ女性の比較を通して」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』136、71-91 頁。
- 土田久美子 2016「『弱者』から『地域人材』への移行は可能か—気仙沼市在住フィリピン出身者グループによる生活再建の試み」長谷川公一・保母武彦・尾崎寛直 編『岐路に立つ震災復興—地域の再生か消滅か』東京大学出版会、263-288 頁。
- 常田夕美子 2011『ポストコロニアルを生きる—現代インド女性の行為主体性』世界思想社。
- 中澤進之右 1996「農村におけるアジア系外国人妻の生活と居留意識 山形県最上地方の中国・台湾、韓国、フィリピン出身者を対象にして」『家族社会学研究』8(8)、81-96 頁。
- 福村真紀子 2017「地域日本語教育から創る『公共の場』—結婚移住女性をめぐる研究を手がかりに」『早稲田日本語教育学』9、81-100 頁。
- 藤田美佳 2005「農村に投げかけた『外国人花嫁』の波紋—生活者としての再発見」佐藤郡衛・吉谷武志 編『ひとを分けるものつなぐもの—異文化間教育からの挑戦』ナカニシヤ出版、221-252 頁。
- 郝洪芳 2010「日中国際結婚に関する一考察: 業者婚する中国女性の結婚動機を中心に」『京都社会学年報』18、67-81 頁。
- 2012「業者婚をした中国女性の主体性と葛藤」落合恵美子・赤枝香奈子 編『アジア女性と親密性の労働』京都大学出版会、231-252 頁。
- 松本邦彦、秋武邦佳 1994「国際結婚と地域社会: 山形県での住民意識調査から (その1)」『山形大学法政論叢』1、160-125 頁。
- 1995「国際結婚と地域社会: 山形県での住民意識調査から (その2)」『山形大学法政論叢』4、206-178 頁。
- 右谷理佐 1998「国際結婚からみる今日の日本農村社会と『家』の変化」『史苑』59(1)、72-93 頁。
- 皆川涼子 2012「被災地での法律相談活動からみた外国人住民—気仙沼・大船渡のフィリピン人住民の姿」鈴木江理子 編『東日本大震災と外国人移住者たち』明石書店、209-221 頁。
- 李善姫 2012「『多文化ファミリー』における震災体験と新たな課題—結婚移民女性のトランスナショナル性をどう捉えるか」鈴木江理子 編『東日本大震災と外国人移住者たち』明石書店、56-74 頁。
- 2018「外国人結婚移住女性と『東北の多文化共生』—『他者化』と『不可視化』を乗り越えて」『東北文化研究室紀要』59、73-87 頁。